## 日本万博博覧会 1970

田畑 裕司

私にとって、大阪万博とその切手には思い出がある。1970年、中学1年の夏休みに1 泊2日で父と参観した。当時から切手収集にどっぷり浸かっていて、万博の切手帳は、 窓口用の銀色の薄手表紙しか入手できていなかった。そのため、万博郵便局では、未入 手の自動販売機用の金色の厚手表紙を、1次・2次とも入手できて満足だった。

世界各国から発行された万博切手は、当時、大人気で「さくら日本切手カタログ」の前身である「原色日本切手図鑑1971年版」の巻末に、全世界の万博切手が採録されていた。 JPSの頒布会でも、自動頒布を行っていたので、その当時の切手付きアルバムが多く残されているが、私の手元にも1冊ある。

このコレクションは、自動頒布の切手を一通り並べるのではなく、非郵趣材料を用いながら、様々な材料で当時の社会的な熱気を伝えようとするものである。

第1リーフのタイトルリーフは、7円切手に国連館記念の小型印を押した入場券、そして大阪市営地下鉄の新大阪から万博中央口までの切符及びバスの時刻表である。いずれも私が使用したものではなく、後日入手したものである。入場料は800円で、今の物価なら5,000円位だろうか。左下のカナダのブリデッシュ・コロンビア州館の公式絵葉書には、切符と7円切手に万国博郵便局の会期末日の特印を押してある。

第2リーフのソビエト連邦のリーフは、ソ連のパビリオン内の売店で売られていた切手を入れた袋と切手販売PRのパンフレットである。これも私が直接購入したものではなく、後日入手したものである。私が大阪で1泊したのは、千里ニュータウンの分譲前のマンションの一部屋で、家具等は揃っていて万博の宿泊用に一般にも開放していた。父は何度か参観していて、私に当時人気のアメリカ館かソ連館の月の石を見せたいと言っていた。しかし、両館とも2~3時間待ちの状況であった。ただソ連館の方が若干並ぶ時間が短いとのことで、2日目の開館と同時にソ連館までダッシュで走り並ぶという作戦を立てて、1時間程度並んで入れた。残念ながら、月の石の印象はほとんど残っていない。パビリオン内の売店で、赤い色の小型シートを買ったことだけを覚えている。

**第3リーフのハンガリーの切手**は、非参加国の例として示した。非参加国は中には実態がない国も含まれているが、収集家の懐を目的としただけあって、図案も魅力的なものが多い。なぜ、ハンガリーがオレンジ色のエアドームが目立つフジグループ館(左)館を図案にしたか不明だが、大成建設が施工した際に関係者に配布した記念品を示した。この館は、動画を見せる内容のため、回転率がよく待ち時間が短くて私も参観できた。

**第4リーフの日本館分室の記念押印**は、万国博郵便局と4つの分室の記念押印の中で最も少ない。私も日本館に行ったのであるが、分室の位置までは記憶にない。入館しなければ、押印できないのならば、本局やほかの分室に比べ少ないのがうなずける。

昭和切手は、中学生の頃から集めているので、もう50年前になります。ただ、熱心に集めたのは最初の10年位で、この間に全日本切手展、JAPEX、そして国際切手展まで出品した経験もあります。社会人になってからは、興味が次第に小判切手に移ったものですから、昭和切手の収集は余り進展もなく、時たま入手する程度でした。

## 日本万国博覧会 1970

日本万国博覧会は、大阪府吹田市千里丘陵において1970年3月15日(日)から9月13日(日)まで「人類の進歩と調和」をテーマに開催されました。海外からの参加国は、76か国に及び、それ以外にも国際機関、都市、企業など多数の展示があり、入場者数も6,421万人の超えました。

この作品では、出展国、非参加国及び開催国(日本)に分けた上て、当時の状況を非 郵趣材料を含めて展示しました。











